

No.13

博物館報



相知町セリ谷経塚出土遺物

昭和39年低丘陵地の密柵園造成中に発見された、東松浦郡相知町セリ谷の経塚出土遺物は、蓋の部分を消失している滑石製外筒（全高37.5cm）と、つまみのある4弁の花文を形どった笠形の蓋をもつ銅板鉄止めの経筒（全高25.5cm）とともに、その類例が極めて少ない10巻の紙本の写経（天地24.8cm）からなっている。写経の奥書には「右始自天永三年十一月十六日 正月廿日薦未時許書写畢 仏弟子孰筆僧永嚴又僧口尊」と記されているところから、埋経の最も盛んであった藤原時代の天永3年（1112）から天永四年（1113）にかけて写経されたものである。

これらの遺物は、その埋置された場所や埋経様式が明らかであるばかりでなく、経筒の中に納められていた写経とその奥書は、現在もなおじゅうぶん判読できる県内唯一の貴重資料である。

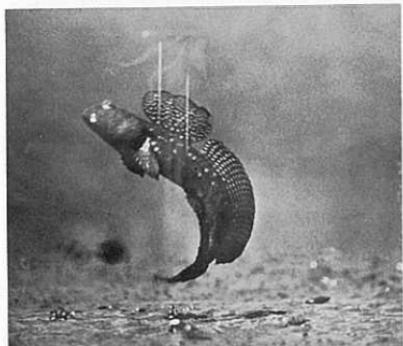
相知町セリ谷経塚出土遺物	1
常設「佐賀県の歴史と文化展」紹介	2・3
教育資料展から	4・5
第9回研究講座	6
県内博物館紹介・佐賀県農業試験場農具資料館	7
博物館日誌・行事紹介	8

展覧会紹介

常設 佐賀県の歴史と文化展



マナヅルの生態 川浪養治氏筆



はねるムツゴロウ 音成三男氏撮影

○考古（2号展示室）

佐賀県は古代より大陸文化の門戸として栄え、大陸の進んだ多くの文化をいち早く受けついだ地方である。

近年、県内各地で繩文時代より古墳時代まで、各種の遺跡の発掘調査が実施され、その出土品については全国的に注目されているところである。その出土資料を当館に一括保存・展示了。

なかでも繩文時代中期の貯蔵穴跡である、西有田町坂の下遺跡出土の各種土器・石器・木器・木の実等は、当時の採集経済生活の模様を知ることのできる貴重な資料といえる。弥生時代では当時の水田農耕生活の所産であ

主 催	佐賀県立博物館
会 場	佐賀県立博物館
会 期	2月20日～3月31日 (9時から16時30分まで)
休館日	毎週月曜日および国民の祝日の翌日

展示概況

○自然史（1号展示室）

常設展における自然史部門の展示は、郷土の総合博物館という本館の性格から、郷土佐賀の自然と風土の紹介とともに、考古、歴史につなぐような展示を前提にして考えた。

佐賀県の地史を紹介するコーナーは、大型県内地質図と、玄武岩、安山岩、結晶質石灰岩、球状閃綠岩、石英、花こう岩など、代表的な岩石の標本を、一面を研磨して美しい岩石の組成をみせて、一般の人々にも親しみを感じられるように、また県内の第三紀層から出た化石も、県内地史紹介の一端として展示した。

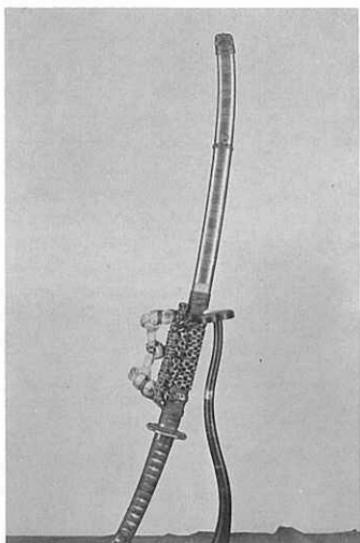
さらに佐賀県は、緑の豊かなところであるが、どのような植物が生えているであろうか。昭和43年度、文化庁が社会教育課に委託して作製した、植物分布図を或程度集約してパネル化した資料で、シイ、カシを主とする常緑広葉樹が何に多いかということを、一見して知ることができる。

「有明海干がた生物」模型はウミタケ、ワラスボを少し手なおしをし、新たに「有明海干がたの風景」と「ムツゴロウの生態」をとらえた写真を加えて、全国的にも珍らしい有明海を、さらに詳しく紹介した。

その他、カブトガニ、県内産昆虫類も紹介した。

る三日月町土生遺跡出土の鉤・鍬等の各種木器を展示している。これらの資料によって2,000年前の稻作文明の一端がうかがえる。さらに当時の墓地である甕棺や石棺から出土した、各種装身具を展示している。

古墳時代の展示資料には小城町久蘇遺跡出土の各種加工用木器や多くの鐵器を展示し、祭りの道具である各種祭祀用品、古墳の壁に描かれた当時の風俗を知ることのできる原始絵画があり、さらに平安時代から盛んになつた経塚の出土品等を特別に展示しており、先史時代から奈良・平安時代までの佐賀県の祖先の生活史の一端がうかがえるようにした。



梨子地杏葉文蒔繪水捲太刀柄

○美術工芸（3号展示室）

美術工芸部門の絵画資料では、3号展示室の西側と北側の全固定ケースを利用して近代洋画を展観する。展示の内容は、近代洋画界に顕著な功績のあった百武兼行、久米桂一郎、岡田三郎助をはじめ本県出身の代表的洋画家を主体に明治初期から昭和に至る近代洋画の流れを追うもので、さらに参考出品として藤島武二、青木繁の優品をも展示了。

展示のねらいとしては近代洋画史を概観することにあるが、また、今回特設した青木繁コーナーをはじめそれぞれが個々の作品鑑賞にも充分たえうる展観である。

工芸関係では、日本で始めて完成された磁器製品の流れを初期伊万里系、古伊万里系、柿右衛門系、藩窯系に分けて展開するとともに古唐津系では、茶碗を中心に、壺、鉢等の生活用品を展示了。

今回は、近世の陶芸技術を現代に受けつぎ高く評価されている12代中里太郎右衛門、12代今泉今右衛門、12代酒井田柿右衛門、奥川忠右衛門、および昭和初期に活躍した松本佩山のほか、参考品として、琉球壺星窯の厨子甕（安政元年・1854）を展示しているが、ここの窯は鹿児島の苗代川の陶工が開窯したもので、九州系、朝鮮系、南方系の技術が交流し、伝統技法がよく守られている窯である。なお4月からは一部展示替えが予定されている。

○歴史（3号展示室）

歴史部門は、仏教関係資料として聖観音立像（重要文化財 三田川町東妙寺蔵 複製）、円鑑禪師坐像（重要文化財 大和町高城寺寄託）のほか2点の仏画。近世資料は今山陣で大友八郎親秀を討取ったといわれる「二間半の槍」などの竜造寺隆信関係の資料と、文禄、慶長の役に関する肥前名護屋城関係の資料を中心に、近世に於ける肥前の国の動きをとらえる資料を展示了。また、幕末、維新の資料は、鍋島淳一郎（直大）に接種している「種痘の図」をはじめ、長崎警備、精煉方関係など鍋島直正の開明的な施策を秀島成忠が録した絵図を中心に、それに関連した資料を展示了。

南面の固定展示ケースには、刀剣関係の資料として、初代忠吉をはじめ9代忠吉までの刀剣8点と槍、薙刀及び太刀柄、鐔、小道具類など18点を展示了。これらの出品物は東京鍋島家の好意による特別出品資料が大部分で、当館で初公開されるものである。なかでも鍋島勝茂佩刀の初代忠吉（寛永7年銘）や6代藩主鍋島宗教佩刀の元成の「杏葉文糸捲太刀柄」、若芝、金家、信家などの鐔、及び金地の鍋島家杏葉紋入りの小柄、笄などは特に精彩を放っている。



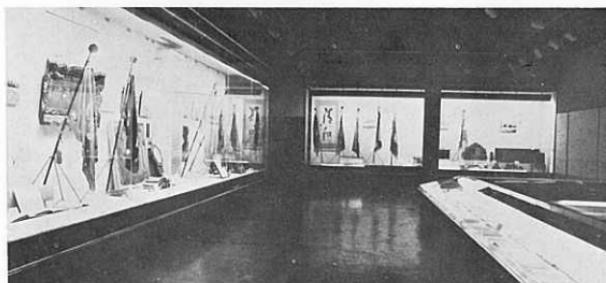
夕焼けの海 油彩1910 青木 繁作



絵唐津水指 江戸中期 (口經 8.3cm 高11cm)

学制発布100年記念

教育資料展から



「佐賀県教育の歩み」展示風景

明治5年8月3日、文部省布達第13号によって「学制」が発布されてから昭和47年はちょうど100年を迎えたので、それを記念した特別企画展として佐賀県の教育の歩みを主題とした「教育資料展」を昭和47年12月2日から翌48年1月18日まで通算33日間、1号～3号展示室で開催した。出品点数は第1部門の「佐賀県教育の歩み」では286品目535点、第2部門の「学校教育100年の歩み」では100品目130点、第3部門の「児童史」では47品目286点、第4部門の「教育に尽した人々」では86品目162点で総計519品目1113点を展示了。これらの資料は県下の小・中・高・大・学及び多くの県民各位から出品をお願いしたもので、元禄時代の聖堂（学問所）、藩校、私塾、寺子屋等の資料から昭和22年の新学校教育制度の発足に至るまでの諸資料を収集展示了。

このうち興味あるものとして「観頃荘の図」がある。これは元禄年間にたてられた佐賀3代藩主鍋島綱茂の別荘で、中央に二の丸から移されたおみ堂様式の聖堂が誌されている。これより数年後建築された多久聖廟と比較すると様式や規模のうえからも面白く、ここが佐賀藩の教学の発祥地ともいえる。また、「學」銘の鬼瓦の一つに寺子生の落書きのある東背振村西往寺の山門の瓦があるが、この種のものは明治になって多くの学校でも使用されていたらしい。明治10年の「学事年報」には、当時の小学校の規模や就学情況が明記されている。例えば第36大区7小区（現在の唐津上場地区）の「学齡人員男712人女797人」に対し就学者は「男298人女11人」など当時の実情を知るうえで貴重なものである。「往物」

は一般に寺子屋の手習本といわれるが、明治15年の「長崎県小学校教科書表」には読書科の教科書として「消息往来読本」「農業往来読本」「商売往来読本」（いずれも明治14年の長崎県師範学校編纂）があげられている。明治26年の「聖影・勅語ニ関スル書類」には御真影を都役所から警官二衛のもとに奉戴している情況が連続として繰られている。大正3年の「学生取締に関する協議決定事項」という1片のプリントには第1項に「遊廓に出入りするを禁ず……」など当時の学生気質を物語るものとして興味深い。終戦直後9月22日付けの通達「終戦ニ伴フ教科用図書取扱方ニ關スル件」によって実施された「墨ぬり教科書」はさらに「学校日誌」にまで墨でぬりつぶされていったことなど時代の趨勢をよくあらわしている。

「学校教育100年の歩み」では創立100年を迎えた有田小学校の100年にわたる130点の資料を特別に展示していただいた。この中には「有田

中学校の開校式（明治17年）の情況を記した「学校日誌」や学校教育施設で常に県下の先導を務めてきた諸資料が展示された。

「教育に尽した人々」では教育行政や教育推進に功のあった大木俊任、大隈重信、江越礼太、中島吉郎、張二男松、田沢義輔、下村湖入、中島ヤス、松信定雄、中島寅浪、山口亮一の11名をとりあげその功績を顕彰した。

この展示会でとり扱った資料は、佐賀県教育の歩みを示す一端にすぎなかつたが、これが教育史究明の緒となれば幸いである。

（学芸課 尾形善郎）



観頃荘に設けられた鬼丸聖堂



江越礼太 明治14年1月設立。わが国の陶業教育機関の嚆矢となる。題字は有栖川宮熾仁親王。



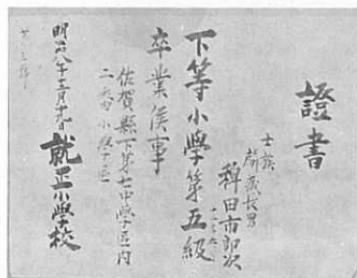
振風教校は現佐賀竜谷学園の前身。明治11年 佐賀市高木町顕正寺に設置。題字は西本願寺第21世明如上人



(昭和10年廃校)



文天祥書



明治8年 下等小学5級卒業證書



明治7年改正 単語図



明治14年長崎県師範学校編



明治14年 長崎県学務課編



長崎県・佐賀県地理小誌 明治13年 明治17年発行

第9回研究講座

学制100年をめぐる佐賀の教育

講師 佐賀大学教育学部 助教授 杉谷 昭 氏

学制100年とは、明治5年、学制が発布されて以来昨年が100年を迎えたということで、ここで一応過去を顧みた時、今日一つの転機が来ていることに気付かなければならぬと思う。

近代教育制度が始まった100年前の佐賀を顧みた場合、何處に教育の営みの焦点をあてるかとなると、やはり幕末の天保10年以降諸藩が藩制改革に入った頃の佐賀10代藩主鍋島直正がうかびあがる。

○幕末の直正を中心とした教育目標

勝海舟の「永川清話」の中に松定慶永や、島津齊彬など、幕末の諸大名とならんで真正に対してもいろいろと人物評が書かれている。しかしこれが一環した教育的な政策批判でないので、真正のとった言動から教育的な姿勢を考えて見なければならない。

佐賀の教育を語る場合、当然藩校弘道館や古賀精里、古賀穀堂、洞庵、謹一郎といった古賀一門の人々と、多久の草場鳳川あるいは医学の大庭雪齋、山村良哲など多くの人物があげられる。そして、これらの人々の行動をつぶさにおさえていくことが必要である。

しかし常にその中心に鍋島直正がいたということを忘れてはならない。

真正は藩主としては勿論のこと、常に開明的な見識で外文化の摂取に積極的であり、進取の気に富んでいた。

また、外政的にも例えば版籍奉還等にも薩摩、長州、土佐に並んで積極的であった。

それと同時に内的には、家臣達を見る眼がさほどなく、包容力と共に才能ある人物の登用とその個性の発見に富んでいたといえる。そこに多くの人材が育ったのではないかろうか。

一般に弘道館の教育が古賀穀堂を中心とした自学自習的な教育方法にあったといわれているが、しかしやはりその中心は藩主の直正という人物が大きく浮かび上がり、教育の目標や、それにともなう精神的な高揚が常に直正の見識に焦点をおかれていたということである。

また洋学研究においても、山村良哲、伊東玄朴など比較的、身分の低い者は朱子学一本の教育を受けないですんだ人達で、彼等が新しい時代を迎える要素をそこに蓄えていたということである。

幕末の直正を中心とした教育目標ないしは、精神的高揚は、対外的な危機感もあっただろうが、はたして何に直正が藩の擧国体制をとったのかはあとで明確にされると思うが、ここに人間育成、人材養成という一つの大きな目標に向って、精神的な高まり、緊張があったことを

後 天 下 之 豊 而 豊
先 天 下 之 豊 而 豊
拳 内 樂 而 樂
堂 暮 春 樂
春 伸 書
楚 門 於
國 國



鍋島直正書 171×99cm

真正に見ることが出来、そこに幕末維新における佐賀藩の教育の意味・目標を発見することができる。

○教育の体制

大木喬任を中心とした、明治の教育体制をみた場合国権論と民権論がどのような時代の背景のもとに、どのような形で現われてきたかを考えなければならない。そして現在の民権論的な立場と国権論的な立場をあらためて考えなければならない。

我々の身近かな初等中等教育というものは、それぞれの地方公共団体の財政によって生き残られている。そしてその形態は教育委員会というものありかたがどおなのをを考えなければならない。

財政というものを考えた場合明治21年から数年の間に財政的な理由のもとに、町村合併が行なわれている。これは太平洋戦争後多くの市町村が合併をしている現在によく類似している。地方公共団体の財政を口にする場合、その中にどれだけの教育費を地方が負担できるのかということが大きな現在の教育の課題になっているのではないかろうか。

また大正の末年に開花した「新教育」というものが連続性と不連続性の中でどのような形で教育現場に現われているか、大正時代に活躍したほとんどの人達が、終戦後の新しい教育制度の中で大いにはばたいているという事実。そういう点で大正7・8年から末年にかけて「新教育」の個性尊重、自発学習といったものが胎頭したが育たなかったのはなぜか。また戦後どのように展開されていったか、そしてどのようなかきなりかたをしているのかということである。

こういう点でも一度学制発布以来の100年をあらためて考えなおさなければならない時期に来ているといえるのである。

昭和48年1月13日博物館中展示室での講演内容の要約。

(文責当館)

県内博物館案内

その6

佐賀県農業試験場、農具資料館



1館長 喜多正次

2所在地 佐賀郡川副町南里・電話川副南5-2141

3入館料 無料

4設立年月日 昭和43年4月1日

5管理者 佐賀県農業試験場

6設置の経緯

昭和43年佐賀博覧会開催の折、農業県としての今昔を表わす農民会館が会場の一角につくられた。当時すでに、農業経営の合理化、農器具の機械化にともない近世から現代まで子孫孫に伝えられてきた佐賀平野のクリーク農業としての農器具が、次第に姿を消す運命にさらされ、かっては貴重な用具であった水車が燃やされるという光景もみられるようになった。

これを機会に、クリーク農業県として発達した本県の農器具の変遷を記録するとともに早急に不用農器具の収集保存がなされなければ、今後、破損、湮滅のおそれがあるということで農器具の調査と収集が行なわれた。

資料館は、県農業試験場の新築移転の際昭和43年設置され、その後、内部改装など行って現在にいたって

いる。

7 資料収集の経過

資料収集の予算はなかったが、各農業改良普及所の情報提供をもとに、職員が土曜、日曜に農家を回り、趣旨を説明のうえ、農家からの寄贈によって収集された。これは職員の熱意と農家の理解の結果によるといえるもので、これらの農器具の調査と収集は今後もなお続けられるとのことである。

8 運営の特色

資料館の館長は、農業試験場長の喜多正次氏で、主任者は、これまで資料収集に当ってきた経営研究室の宮島昭二郎氏で、資料の整理、手入れは、農業研修生（指導部60名、高等部50名）の実習時間中に行なっている。

9 施設の規模

木造平屋建、約60坪

10 主な資料

イ、耕耘関係（すき、まが外）

ロ、脱穀関係（竹センバ外）

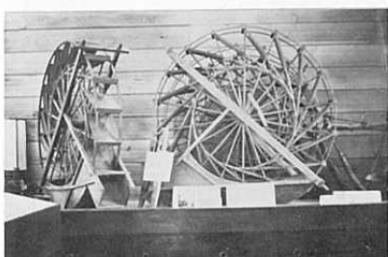
ハ、生産関係（はえすき（長床犁）、くれがえしすき、水田すき、もぐらすき外）

ニ、クリーク用具（水車、ごみくみ桶、手桶、かすり、ぶい外）

ホ、農家副業関係（織機類外）

ヘ、生活用具（醤油しぼり外）

ト、文書関係（庄屋文書、地券外）
など 700点。



博物館日誌

- 12月13日 駒沢大学教授中島俊教氏施設調査のため来館
 12月14日 熊本市立博物館長上村健一氏施設調査のため来館
 12月21日 佐賀大学教授横尾多美男氏有明海採取のカブトガニ2点(オス・メス)寄贈
 12月27日 館内消防訓練
 12月28日 京都大学助教授樋口隆康氏資料調査のため来館
 執務納め式
 1月4日 執務始め式
 1月13日 第9回研究講座「学制100年をめぐる佐賀の教育」当館中展示室で
 講師 佐賀大学助教授 杉谷昭氏
 1月15日 「教育資料展」成人の日のため無料公開

- 1月18日 「教育資料展」終了(総観覧者数4,949名)
 1月24日 NHKテレビ、スタジオ102で「日本古地図・絵図展」放映
 1月25日 「日本古地図・絵図展」開場式
 1月27日 「日本古地図・絵図展」講演会「世界地図学における日本の古地図」当館中展示室で
 講師 広島大学教授 米倉二郎氏
 2月2日 大阪大学教授海野一隆氏「日本古地図・絵図展」観覧のため来館。
 2月6日 鍋島直泰氏ほか「日本古地図・絵図展」観覧のため来館。
 2月9日 「西日本地区県立図書館長会議」当館中展示室で
 2月13日 長崎県立美術博物館長松尾哲二氏、長崎県議会文教常任委員長、同副委員長ほか来館
 「日本古地図・絵図展」終了
 (総観覧者数8,358名)

行事お知らせ

修学旅行の計画に博物館の見学を折込んでください。

事業名	月日	曜	時間	内容
常設 佐賀県の歴史と文化展	2. 20 から	火	9. 00 ~ 16. 30	佐賀県の地質時代から現代までの自然史資料や考古・歴史・美術工芸の資料を系統的に展示し本県の歴史と文化の特質を一般の理解に資する。

白蛇山岩陰遺跡・

盗入岩洞穴跡の発掘

当館では開館記念事業の一環として「西北九州における先土器時代から縄文時代への編年の研究」という問題を提起し、伊万里市東山代町所在白蛇山岩陰遺跡の発掘調査を実施してきた。

第1次発掘調査は昭和46年7月から8月にかけて伊万里市と共に、伊万里市郷土研究会その他の協力を得、実施した。第2次発掘調査を今年2月23日より3月5日まで、伊万里市と共に行なっている。第1次調査では出土遺物が多く、縄文時代中期の地層まで掘り下げることができなかった。今回は基盤まで掘り進め、縄文時代の始源期の遺物の発明とともに先土器時代の石器の追求を行ない、当時の原始生活の様相を解明するのに大きな期待をかけている。

さらに、今年3月23日より1週間西有田町の主催で盗入岩洞穴(始源期の土器や石槍が出土)の第2次発掘調査と立木原台地の第1次発掘調査が実施されるので、当館でも西北九州の先土器時代から縄文時代研究の一環と

して全面的に協力する予定。



博物館報	第13号
発行年月日	昭和48年3月1日
編集	古賀秀男
発行	佐賀市城内一丁目15~23
印刷	佐賀印刷社